【論文】

地域アイデンティティの再興
－川口鋳物，初午太鼓，サードプレイス－

木村　由梨

Ⅰ　はじめに

ある産業が特定の地域に集積している場合，その産業と地域住民の日常生活は密接に結びつき，そこ独特の文化が生まれることがある．本研究で取り上げる埼玉県川口市の初午太鼓は，鋳物工業から生まれた郷土芸能である．ここで一つの疑問が生じる．戦後日本の製造業の構造転換によって，川口鋳物は衰退または再編を余儀なくされているが，筆者の観察するところ，初午太鼓はコンクールのかたちをとって，むしろ広く一般市民に広がっている．なぜであろうか．本研究の目的は，地域産業の衰退と郷土芸能の興隆という「ずれ」に着目し，現在の川口市における初午太鼓の意味を，地域アイデンティティと関連づけて考察することである．

地域に残る文化には,祭りや盆踊り,民謡などがある．これらの起源は大抵の場合，その地域の産業や信仰などといった生活実態と強く結びついている．たとえば山形県の花笠音頭は，大正時代の徳良湖築堤工事で歌われた「土搗歌」という作業歌を元唄としている.作業歌とは，単純な重労働を集団で行う際に，複数人がタイミングを合わせたり気力を維持したりする必要性から生まれた歌のことである．民謡においては，だいたいの元唄は作業歌であり，作業歌でありながら，別の活動領域に転用されて二重，三重の意味を持つようになってくる（鶴見 1999: 20)．先ほどの花笠音頭の場合，元は作業の拍子をとるために歌われ始め，次第に踊りがつくようになり，今や世界的にも日本を代表する民謡として「フラワーハット・ダンス」の名で知られるようになった（房前・竹林 1995)．

川口市に伝わる初午太鼓は，鋳物師が初午の日に，稲荷神社に火伏せを願って奉納太鼓として叩き始めたことを起源とする．一晩中鳴り響く太鼓の音が，荒川を越えて東京の赤羽まで聞こえたとの言い伝えもある．しかし川口市の鋳物工業が再編を迫られる中で，初午の日に太鼓を叩く工場は次第に減少していった．他方で，太鼓を披露する機会として1970年代に「初午太鼓コンクール」が開催され，現在では女性，子どもを含めた一般市民が広く太鼓を叩くようになっている．

川口市の鋳物工業の歴史については宇田（2012a，b）などの研究があり，また初午太鼓については川口大百科事典刊行会編（1999）に資料がある．しかし，初午太鼓に関する研究や，鋳物工業の再編と初午太鼓の変容を結びつけた研究は，筆者の探す限りでは存在しない．本研究では，地域産業と地域文化を結びつける要素として，日常生活空間（職場，住居，余暇）に注目することにした．

調査としては，文献調査，川口市の鋳物工業や初午太鼓に携わる住民への聞取り調査，太鼓クラブへのアンケート調査，2017年３月に開催された初午太鼓コンクールの参与観察を実施した.聞取り先は,鋳物工業協同組合，初午太鼓連絡協議会のほか，2017年の初午太鼓コンクールに出場した団体から，出場団体で唯一の小学校と幼稚園，コンクールの強豪と評判の太鼓クラブ，地域の名を冠する太鼓クラブを選定した．

Ⅱ　川口鋳物と初午太鼓の伝統的関係

１．現在の川口市概要

川口市は埼玉県の南端に位置し，荒川を隔てて東京都に接している．川口市では，古くから地域産業として鋳物や植木などの産業が発展してきた．特に1962年に公開された吉永小百合主演の映画『キューポラのある街』により，「鋳物の街」として全国に知られるようになった．しかし戦後に東京のベッドタウン化が進み，近年では埼玉県に住みながら昼間は東京に通勤・通学する，いわゆる「埼玉都民」が多いといわれている．

川口市は幾度かの市町村合併を経て現在の市域に拡大している．図１にはこれまで合併してきたそれぞれの地域の範囲を示している.1925年の「普通選挙法」により，市長が市会から選挙される制度になると，1933年，川口町，横曽根村，南平柳村，青木村の１町３村が合併して川口市が誕生した．その後1940年に芝村，神根村，新郷村の３村，1956年に安行村，1962年に美園村の一部であった戸塚，そして「平成の大合併」によって2011年に鳩ヶ谷市と合併し，現在の川口市となった[1)]．市制施行時

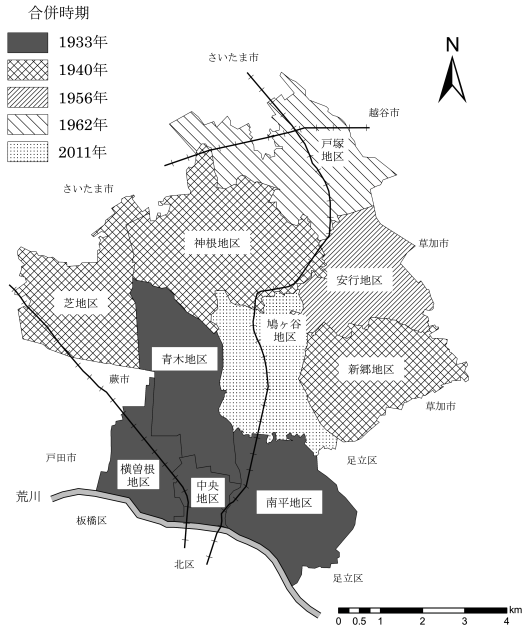

図１　川口市地区別概略図

（市民説明会資料より筆者作成）

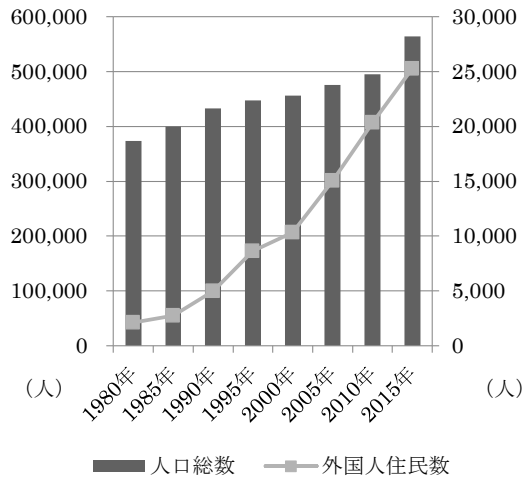

図２　川口市の人口推移

（川口市統計書から筆者作成）

の川口町を中心とする川口市は，荒川を挟んで東京市と隣接する工業地帯であった．その後は，市町村合併による市域の拡大から周囲の住宅地域を広く含むようになり，東京のベッドタウンの性格を強めた．

川口市の人口は2017年１月１日現在で565,506人であり，年々増加傾向にある（図２）．2010年から2015年にかけての増加幅が特に大きくなったのは，2011年に鳩ヶ谷市（約62,600人）と合併したためである． 2015年国勢調査の５年前常住地のデータによると，川口市人口の10%が川口市以外から，１%が外国からの転入者であった．また全転入者の内訳として，県内他市区町村からよりも他県（特に東京都）からの転入が多い．これは，東京在勤の人々が，通勤時間が短く家賃の比較的安い川口市に多く移り住むからであろう．

実際に川口市民のうちで他県に通勤通学する割合を2015年国勢調査から見ると，15歳以上の従業者および通学者の内訳で，４割近くの人々が他県に出ており，そのうち実に９割以上の人々が東京都に通勤通学している．

また，国外から川口市への流入者数がどの程度あるかは，図２からわかる．1980年から2015年にかけて外国人住民数が10倍以上に増えていることがわかる．その中で特に多いのは中国人と韓国・朝鮮人であり，2015年時点では外国人住民数の72%を占めている[2)]．

1990年から2010年における，川口市を常住地とする15歳以上就業者数の産業大分類別割合を，川口市統計書から比較してみた．製造業と卸売業，小売業の就業者数は近年減少傾向にあり，反対にサービス業の就業者数が増加していた．製造業の就業者はこの20年間で割合が半減しているので，鋳物業従事者も割合が減少していると考えられる．

２．川口鋳物工業の歴史

遅くとも16世紀までには川口での鋳物生産が始まっていた.その後,川口で鋳物工業が発展した理由としては，地元荒川岸から鋳物に適した砂や粘土が採れたこと，日光御成道や舟運によって原料や材料，燃料，製品の運搬が便利であったこと，江戸（東京）という大消費地や京浜工業地帯に隣接していたこと，近隣から労働力を得やすかったことなどが挙げられる（宇田 2012, b）．また，荒川西岸の江戸側ではなく東岸の川口側に工場が集積したのは，鋳物工業が火を扱うことから江戸の町が火事になることを防ぐ意味があったと考えられる．

江戸時代には鍋，釜，鉄瓶，鋤，鍬など日用品や農具の製造をはじめ，梵鐘，灯篭，天水鉢といった社寺用具を造った．1641年には鋳物師の永瀬治兵衛守久が錫杖寺の梵鐘を造り，これが1958年に埼玉県指定文化財に指定されている．この梵鐘造りの技術を生かし，幕末には幕府や諸藩からの注文で大砲や弾丸を製造していた[3)]．

明治時代に入ると，技術革新により鋳物工業は飛躍的な発展を遂げた．生産品目は日用品，農具，仏具から建築用品，鉄管，機械部品などと拡大していった．1877年に川口で造られた学習院鉄門は，唐草紋様をあしらった和洋折衷の様式で，文明開化時の様式と技術を伝えていることから1973年に国の重要文化財に指定された[4)]．満州事変以降は軍需関連産業の色が濃くなり，1942年には市単独で鋳物生産量の日本一を達成した．当時の川口鋳物工業協同組合の組合加入事業者486社，生産金額は8,740万円であった．終戦直後は不足していた鍋，釜，やかんなどの日用品生産が盛んになった．輸出の増加，設

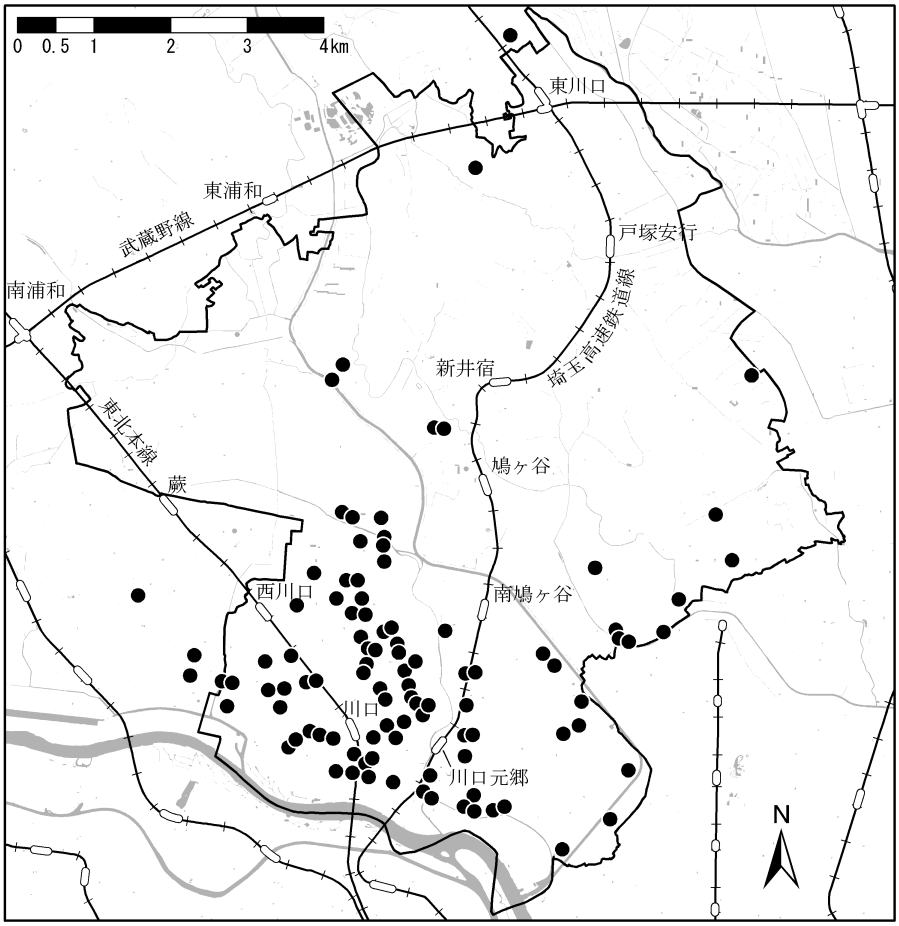

図３　川口鋳物工業協同組合加入事業者の分布

（川口鋳物工業協同組合編（2007）より筆者作成）

備の近代化により，1930年代半ばから日用品に代わり機械鋳物の生産が急速に伸びていった．1958年に国立競技場の聖火台を製造し，1964年の東京オリンピックでも使われたため，川口鋳物の技術力が全国に知れ渡った．

しかし，1956年の首都圏整備計画により，川口市は既成市街地と近郊地帯に指定された．これを機に川口市の首都圏への包摂が進み，生産物市場を通じて京浜大企業への系列化と東京のベッドタウン化が進み始めた（杉森 1973）．1973年に川口鋳物の生産量は40万７千ｔになりピークを迎えたが，工場周辺の住宅地化による公害苦情の増加や地価の高騰により，操業中止や立退きに追い込まれる工場が増加した．廃業した工場の跡地には，次々とマンションが建設されていった．1985年のプラザ合意に始まった急激な円高は，輸出不振，景気後退のしわ寄せを川口市にもたらし，機械産業の底辺産業である鋳物工業は特に大きなダメージを受け，倒産する企業が相次いだ（島田 1990）．

図３に現在の川口鋳物工業協同組合加入事業者の分布を示している．図の閉曲線で示した部分が現在の川口市の範囲である．この図から，加入事業者は荒川沿いやJR川口駅周辺に集中していることがわかる．これを図１の地区別概略図と重ね合わせて見ると，1933年の市制施行時に川口市となった中央地区，横曽根地区，南平地区，青木地区に多く分布していることがわかる．

川口市の鋳物工業をマクロ的に見るために，図４，５を作成した．これらはそれぞれ1945年から2004年における川口鋳物工業協同組合の加入事業者における従業員数，生産量の推移を示している．従業員数に関しては，1950年代から1960年代にかけてピークを迎え，その後減少し続けていることがわかる．それに対し生産量は1960年代から1990年代にかけて激しい増減を繰り返しながらも高い水準で推移したが，バブル崩壊後に減少に転じ，2002年頃からは回復傾向が見られる．

従業員の減少による人手不足を補う方策として，川口では中国やベトナムからの研修生を受け入れている．これは1981年に中国側からの要請で始められたもので，中国の銑鉄，コークスを日本国内価格の３分の２で供給する代わりに，研修生に技術指導するというものである（島田 1990）．1990年６月に「出入国管理及び難民認定法」の一部改正が行われ，団体監理型の研修として中小企業組合等が共同で外国人研修生を受け入れることが認められた．その実現の一端を協同組合川口鋳物海研会が担っ

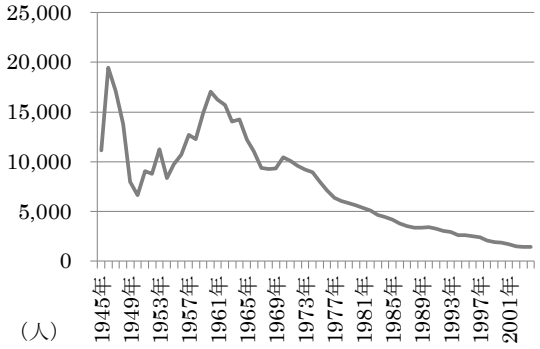

図４　川口鋳物工業協同組合加入事業者の従業員数の推移
（川口鋳物工業協同組合編（2007）より筆者作成）

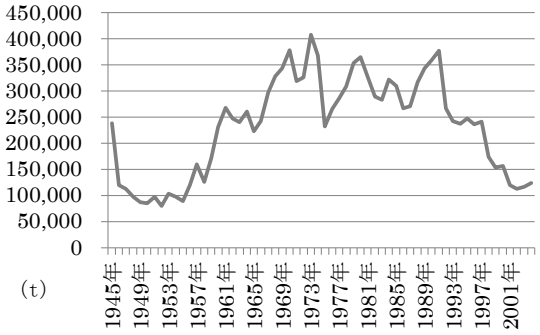

図５　川口鋳物工業協同組合の生産量の推移
（川口鋳物工業協同組合編（2007）より筆者作成）

た．鋳物技術の研修は川口鋳物工業協同組合に所属している企業が担っており，2011年時点で中国人59人，ベトナム人74人を受け入れている．現在，海外鋳物研修生の研修期間は３年であるが，５年に延長する動きもある（川口鋳物工業共同組合編 2007）．中国の研修生は本国の鋳造工場に従事しており，経験者であるため１年研修すれば鋳物職人らしくなるという[5]．

また，１組合員当たりの鋳物生産量と生産金額の推移を見ると，増加していったことがわかる．工場数が少なくなっていたために工場１軒当たりの受注が増え，それを技術革新による生産力の向上によって対処してきた結果だと考えられる．

実際に現在川口市で生産されている鋳物製品としては，フライパンや自動車のエンジンなど身の周りにあるものから，街路灯，銅像，マンホールなど公共のものなど多岐にわたる．JR川口駅西口を出ると写真１のような銘板がある．川口駅を利用する際に目に入るので，普段意識していない人々もここが「鋳物の街」であることを思い出すことができる．

３．川口鋳物工業と初午太鼓の関係

１）初午とは

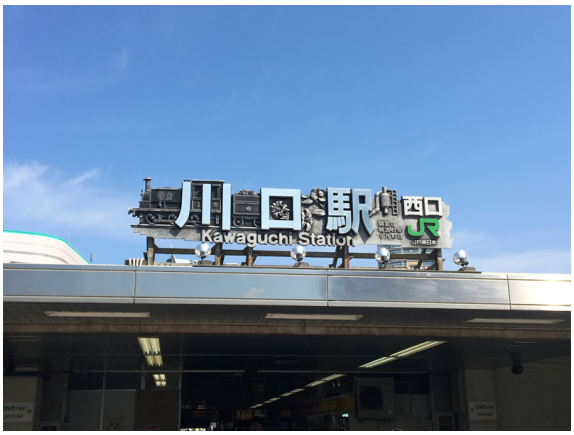

写真１　JR川口駅西口の銘板
（2017年３月12日筆者撮影）

「初午」とは，旧暦の２月初めの午の日のことであり，稲荷信仰ではこの日に祭などの行事を行っている．これは，伏見稲荷の祭神が稲荷山の三ヶ峯に降臨したのが711（和銅４）年２月11日の午の日であったと伝わっていることに由来する．稲荷は「稲生り」の意味で農業神とされ，近年ではそれに加えて殖産興業神，商業神など産業全般の神として信仰されており，地区や屋敷，企業などに多く祀られている．初午の日に火を使うと火事になるといわれ，風呂は沸かさずお茶も飲まなかったという．初午は宵宮から「正一位稲荷大明神」の幟を立て，社に豆腐，油揚げ，赤飯などを供え，参詣人にも振る舞う．地区により囃子を奉納したり，子どもたちが太鼓を担ぎ囃し立てて家々を回ったりする（川口大百科事典刊行会編 1999：371）．

かつての川口町では鋳物工場のほとんどが稲荷を信仰し，初午に太鼓を叩いていた．太鼓に至った経緯としては，炉の火の番を夜通しする際に酒を飲んで酔っ払って茶碗を叩いた動作が太鼓に変わったのではないかと伝えられている[6]．初午の宵宮から工場を休みとし，大きい工場では社の前に祭壇を作り，神酒神献を供え，中には舞台を設営して大太鼓，小太鼓を並べ，若者が競い合って「チャンチャンチャカマカ」のリズムの初午太鼓を絶え間なく叩き，威勢を盛り上げていた．工場主は日頃から鋳物製造による騒音や振動で近隣住民に迷惑をかけているとの気持ちから，赤飯やミカンを配り歩いたという（川口大百科事典刊行会編 1999：371）．

２）職住近接空間における初午太鼓

1921年頃から1932年頃の川口町金山町には，61軒の鋳物工場があった．ほかにも機械工場や鉄工所，木型屋，焚き屋，鍛冶屋など鋳物業に関連した業種が数多く存在していた（宇田 2012a，b）．

また当時の鋳物の街は，鋳物業を支える人たちの生活の場でもあり，工場には工場主の住宅が隣接しており，付近には多くの長屋が建ち並んでいた．1932年の川口町全体における借家の数は，全戸数の７割５分強を占めていた（宇田 2012a，b）．そのほとんどが長屋形式の住宅であり，通りに面した家には小間物，雑貨，駄菓子屋などの小店舗が入り，奥に入った裏長屋には鋳物職人や鋳物業に何らかの関わりのある人たちが居住していた．ほかにも米屋や八百屋，魚屋，酒屋，先頭，理髪店，飲食店など，鋳物屋や鋳物関連業に従事する職人や徒弟たちの生活を支えるさまざまな商売があった．

そして川口町では，鋳物工場のほとんどが屋敷神として敷居内に稲荷社の祠を祀り，初午に太鼓を叩いていた．初午太鼓の始まりは川口町の鋳物職人が稲荷神社に火伏せを願い，奉納太鼓として叩いたことにある．稲荷神は火伏せの神としても崇められているのである．火を扱うことを仕事とする鋳物師にとっては，稲荷を祀る「初午祭り」は大切な行事であった．

初午の日は旧暦の２月初めであるので，初午祭りは毎年３月初めの午の日に鋳物工業の作業場で行われてきた．祭りの前日の宵宮から子どもたちによる太鼓の打楽が始まり，夜には子ども衆や若衆が交代で夜通し打ち続けた．一晩中太鼓の音が鳴っている工場は商売繁盛・家内安全だといわれ，子どもたちが叩きに行くと喜ばれ，鋳物師がリズムを教えたという．古くからあるこの風習については，江戸末の記録に「川口宿の宵宮の太鼓の音が，雲間に轟く雷のごとく，海から聞こゆる潮騒の如く」と残っている（川口大百科事典刊行会編 1999：371）．

Ⅲ　初午太鼓コンクールの形成

１．初午太鼓の転換期

ここからは初午太鼓連絡協議会会長のＫ氏に対する聞取り内容をもとに記述していく．Ｋ氏は川口市に生まれ育ち，幼少期には初午の時期に工場を巡り直接鋳物職人から太鼓を教わり，その後川口市に初午太鼓の正式な形を広め次世代への継承活動をしている人物である．

高度経済成長期に，川口市は鋳物工場の周辺にも住宅が密集し，初午太鼓を「騒音」ととらえる新住民が増えて，以前のように鋳物工場で太鼓を叩くことができなくなった．そこでＫ氏らが川口市役所へ太鼓を叩く場所の確保を訴えたところ，公民館が提供された．これは，地域産業と地域住民との紐帯であった初午太鼓が，川口市という行政組織から公的に承認された最初の場面といえよう．

また，そのような中で，初午太鼓を川口市の郷土芸能の一環として残していく機運が高まり，約50年前にＫ氏が初めて初午太鼓に音符をあてたという．川口鋳物の職住近接空間においては，初午太鼓にわざわざ音符をあてる必要がなかった．しかし，この伝統芸能の将来を案じたＫ氏によって，鋳物工業に関わらない人々にも理解できるかたちで，芸能のリズムが保存されたのである．身振り，手振りで伝わった芸能が，コミュニケーションの言語を持ったことは，後のコンクールの開催に繋がる重要な基礎だったといえよう．

初午太鼓は鋳物工場や稲荷神社という空間を離れて，しかし初午の日の前後という時間は変えずに，1971年から毎年３月にコンクールの中に蘇った．初午太鼓がコンクールというかたちで市民向けに開放された時期が，ちょうど鋳物の従業員，生産量のピークを過ぎた頃であったこと（図４，５）は重要である．川口市の伝統に対するある種の危機意識が，鋳物関係者に新しい活動を促したといえないだろうか．コンクール開始当初は川口市主催で，おそらく各鋳物関係組織が協賛していたと考えられる．

川口市は1933年の市政施行以後の50年間，市長は９名（18代）が務めてきたが，そのうち実に７名（16代）が鋳物業関係者あるいは鋳物師の家の出であり，コンクール開始当初の1971年も鋳物製造業従事者が市長を務めていた．また，1933年の市政施行時は，市議会議員の定員30名のうち鋳物関係業に属する議員が16名おり，全体の53％を占めていた．1942年の２期目の議員では58％を占めており，鋳物業関係者が最も多くの市議会議員を輩出した時であるといわれている（宇田 2012a）．これらのことから，川口市では鋳物業が行政や政治にも関わってきたことがわかる．したがって，川口市役所が初午太鼓を練習する場所として公民館を提供し，初午太鼓の披露の場所としてコンクールを開催したことは，当時，すんなり受け入れられたのではなかろうか．

そして1977年の第７回初午太鼓コンクール開催時に，初午太鼓本来の姿を探り，伝統の郷土芸能として保存していくことを目的に初午太鼓保存会が設立された．これは川口鋳物工業協同組合，川口商工会議所，川口機械工業協同組合，川口木型工業協同組合の４団体から成り，事務局は川口鋳物工業協同組合内に置かれている（川口鋳物工業共同組合編 2007）．保存会の事業は初午まつりと初午太鼓コンクールの開催，研究会，講習会の開催等である．第８回から初午太鼓コンクールはこの保存会が主催している（川口大百科事典刊行会編 1999：371）．この保存会が初午太鼓コンクールの主催者であり，同時に鋳物関係者で占められていることは，川口鋳物と初午太

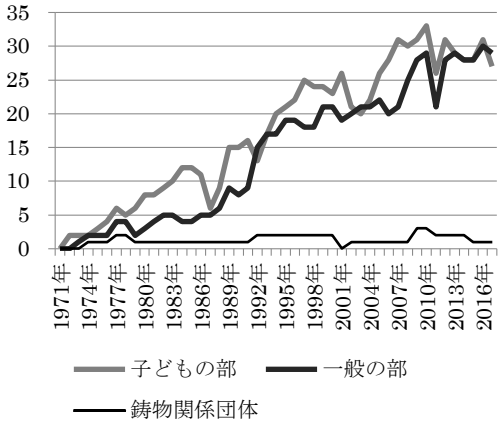

図６　初午太鼓コンクール出場団体数の推移
（初午保存会の資料より筆者作成）

鼓を結びつけ，さらに初午太鼓という芸能を，形を変えて普及する主体ができあがったといえる．

コンクール参加者は年を追うごとに増加し，2017年の第47回大会では，子どもの部27チーム，一般の部28チームの合計55チームが出場した．また，鋳物関係組織や信用金庫など約50の団体が協賛した．コンクールが始まった当初は川口市民会館で開催しており，10年ごとの記念大会では公益財団法人川口総合文化センターが運営する「川口総合文化センターリリア」のホールで開催していたが，川口市民会館は東日本大震災の影響で使えなくなり，第41回からは毎年リリアで開催するようになった．リリアはJR川口駅西口正面にあり交通の便が良いので，こちらに変更した後はコンクールの観客数も増えたという．リリアは，音楽ホール，ギャラリー，スタジオ，会議室，子育てサポート，レストランなどを含む市立の総合的な文化施設であり，ここでコンクールが開催されることは，初午太鼓が川口鋳物の芸能から川口市の文化事業に変容したことを意味する．

２．初午太鼓への関わり方

１）コンクール出場団体の変遷

コンクールの概要について，聞取り調査の結果から述べていく．コンクールは子どもの部と一般の部に分かれており，中学生以上が一般の部で出場する．初午太鼓は10人１チームで叩くことになっているため，１団体から複数のチームで出場することもできる．賞は市長賞や初午太鼓保存会会長賞，審査員特別賞などさまざまなものがあり，2017年現在は子どもの部は14種類，一般の部は11種類の賞があった．１団体当たりの演奏時間は子どもの部３分，大人の部４分と決まっており，コンクールの時間は休憩などを挟んで10時から17時頃まで続く．重要なことは，コンクールに出場するためには初午太鼓保存会に所属する必要があり，所属していない団体は出場することができないということである．ただし初午太鼓保存会によると，コンクールには出ず，保存会に所属せずに活動をしている太鼓団体も存在するそうである．

図６で示しているのは，初午太鼓保存会に記録が残っているコンクール出場団体数である．この図からわかるように，団体数自体は年々増加してきている．図では開催初期の出場団体が０になっているが，初午太鼓保存会が設立されたのが第７回開催時だったため，それより過去の開催に関しては実際とのずれがあるのだと考えられる．なお，2011年の第41回大会では出場団体が甚だしく減少している．東日本大震災の影響でコンクールの開催が８月に延期になったため，出場団体が減ったのだと考えられる．

メンバーの内訳に関しては，川口鋳物工業協同組合によると太鼓クラブ全体の中で女性が約７割を占めている．たとえば赤井子ども会太鼓クラブは小学生から高校生が所属するが，30人中18人が女子である（2017年10月現在）．男子も女子も友達や兄弟が太鼓をやっているのを見て入会するのは同じであるが，男子は途中でスポーツをやりたくなって辞めてしまうことが多く，結果として女性の方が長く続ける人が多くなるのだという．しかし，大人も含め女性が７割を占めるというのはほかにも理由がある．男性主体の鋳物工業と女性が多い太鼓クラブという現実は，どのように理解できるだろうか．

図６には鋳物関係の団体数の推移も載せている．これは元の資料に掲載されている団体名から，鋳物関係団体だろうと予測できたものをカウントしている．判断基準としては，①実際の鋳物企業の名前である，②「鋳物」の字が入っている，③鋳物に関わっているとわかる（商工会議所など）の３点に定めた．グラフを見ると，一般市民が所属する団体数が右肩上がりで増加しているのと比べ，鋳物関係団体はほとんど変化していない．鋳物関係団体はコンクール創設の母体として出場してきたが，その母数の減少に加え，コンクールという形式に馴染まず，出場団体数の減少に繋がった可能性が考えられる．

コンクールの審査基準はリズム10点，調和10点，バチさばき10点の合計30点である[5]．「初午太鼓」のリズムは音符で定められてはいるが，コンクールではこれにいかにオリジナリティを加えていくかで評価が変わる．テンポに緩急をつけたり，音量の強弱をつけたりアクセントをつけたりすることで，出来栄えを競う．太鼓の演奏技術や「チャンチャンチャカマカ」の初午太鼓のリズムといった基本を押さえた上で，いかにその団体らしさを表

現するかが，一つの音楽表現として求められる．このようにして，川口鋳物に由来する初午太鼓の伝統的な形を維持しつつも，自由な演奏の幅が生まれたのであろう．

２）初午太鼓が演奏される機会

初午太鼓が演奏される大きな機会としては毎年のコンクールが挙げられるが，川口市で初午太鼓が演奏されるのがその日だけというわけではない．

たとえば，小学校として唯一コンクールに出場している川口市立青木中央小学校（以下，青木中央小学校と表記）は，鋳物職人の慣習を引き継ぎ，毎年生徒が奉納太鼓を叩いている．ほかにも，毎年の運動会で初午太鼓を披露している．

また，幼稚園として唯一コンクールに出場している学校法人木浦学園小鳩幼稚園（以下，小鳩幼稚園と表記）は，12月初旬のクリスマス会で保護者に向けて毎年初午太鼓を披露している．小鳩幼稚園では全ての先生が太鼓を習得しており，毎年園内で開かれる七夕祭りで保護者や園児に向けて披露している．また，これは毎年ではないが７月頃に特別養護老人ホームに慰問に行くことがあり，その際は園児が盆踊りや歌を披露した最後に先生たちが太鼓を披露している．依頼があると町内会の盆踊りなどに出場することもある．

ほかにも，一般の太鼓クラブの活動として初午太鼓が披露されることもある．たとえば和太鼓颯というクラブの場合，地域のイベントなどで出演の機会がある場合に初午太鼓を叩くことがある．川口市では折々の機会に初午太鼓が演奏されている．

３）川口市民が太鼓に携わる理由

太鼓クラブの一つである和太鼓颯へのアンケート調査と，各関係者への聞取り調査を実施した．聞取り調査では，太鼓を叩く側として和太鼓颯や赤井子ども会太鼓クラブ，青木中央小学校，小鳩幼稚園を対象とした．またそれ以外の視点として，川口鋳物工業協同組合，川口初午太鼓連絡協議会会長Ｋ氏に聞取りをした．

和太鼓颯へのアンケート調査は仕事を持つ大人のメンバーを対象とし，14名から回答を得た．太鼓に携わる理由は「太鼓を始めたきっかけ，続けている理由」として質問し，複数選択の回答形式にした．選択肢は大きく四つの分類に当てはまるよう作成した．

その回答を職業別，通勤先別でグラフに示したのが図７である．職業別の人数内訳は，専門職３名，講師２名，会社員９名である．図７-aから，会社員のメンバーはほかの職業の人と比較しても太鼓に携わることで地域との

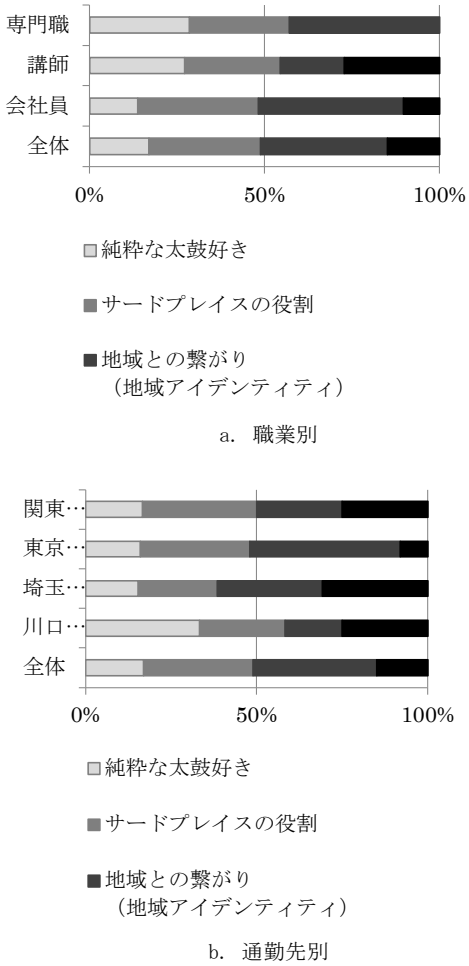

図７　「太鼓に携わる理由」

繋がりを最も大きく感じていることがうかがえる．また２番目に割合が大きいのが「サードプレイスの役割」であることから，太鼓を叩くことで第３の場所を得ていることがわかる．サードプレイスとは職場でもなく住居でもない中間の居場所のことであるが，より詳しくはⅢの３で述べる．また図７-bから，川口市内で働くメンバーは純粋に太鼓が好きな人が多い．一方で東京都内に通勤するメンバーは太鼓に携わることで地域との繋がりを感じている．和太鼓颯のメンバーはほとんどが川口市生まれ川口市育ちであるが，通勤先の違いによって太鼓に携わる理由も大きく異なっている．

また，アンケート調査では太鼓の練習がある日の一般的な流れも記載してもらった．東京都内に通勤する40代女性の会社員の一日は，家族の食事に合わせた流れになっており，退社後に夕食をとって太鼓の練習に向かうには定時退社をする必要がある．川口市内で専門職として働く30代女性の一日は，直前まで勤務してから太鼓練習に向かっている．いずれにしても平日の夜19時から21時の時間を定期的に割くには，多くの努力が必要になると思われる．

和太鼓颯会長のＩ氏への聞取り調査によると，大人の間では若手が親世代に太鼓を教え，親世代が若手に生活や仕事のアドバイスをする関係性ができている．また練習以外でも交流の機会が多く，「颯は大きな家族」と形容することもあるという．また，子どもたちも練習を通して年上を尊重し年下を守ることを身につけていく．そのような中で，兄弟のいない子どもも「颯に来ると兄弟がいる」と言うこともある．このように，太鼓を叩くことを楽しむのと同時に，和太鼓颯というコミュニティが維持されている．

赤井子ども会太鼓クラブは，友人や兄弟が太鼓をやっている姿に憧れて入る子どもが多い．ここで指導者をしているＣ氏は，もともと子ども会で太鼓をやっていた．次第に指導者が少なくなっていくことを知り，それなら自分が担おうと思ったという．現在は他の団体も含めて太鼓の指導をする仕事をしており，併せてアルバイトもすることで生計を立てている．

青木中央小学校は，1963年に設立されてから奉納太鼓を担い始め，そのまま初午太鼓がクラブ活動になった．４年生以上の３学年で30人までしか所属できないため，希望者多数の場合はオーディションを行う．青木中央小学校としては，初午太鼓を通して地元のことを知り，太鼓の音が胸に響いてわくわくする感覚を経験してほしいと考えている．また，コンクールへの出場は目標を作ってモチベーションを上げることや，活動にメリハリをつける教育的な意味があるという．

小鳩幼稚園は，園児に日本古来の文化を，楽器を通して伝え，太鼓の響きに感動する経験を与えたいという思いで初午太鼓をカリキュラムに入れている．川口市内には2017年現在48の幼稚園があるが，指導できる先生がいないことや太鼓を揃える大変さから，カリキュラムに太鼓を取り入れる園はほかにない．小鳩幼稚園も川口市以外から就職する先生が多いため，着任して初めて太鼓に触れることになる．川口初午太鼓連絡協議会会長のＫ氏が先生を指導し，先生同士で技術を伝承している．

川口鋳物工業協同組合はその中に初午太鼓保存会の事務所を置く立場として，「初午太鼓＝鋳物工業」の意識づけをしていきたいと考えている．初午太鼓は広く一般の人々が叩くようになってきたが，もともと鋳物工業から派生した文化であると知っている人は少ない．その意識づけのためにこれまでいくつもの活動をしてきている．それについては次節で記述する．

３．初午太鼓と鋳物工業との関連意識

和太鼓颯会長のＩ氏によると，普段の活動では鋳物工業のことを意識していないが，頭の中で初午太鼓と結びついてはいるとのことだった．毎年のコンクールで初午太鼓が鋳物工業から派生した話を聞く機会があり，小学校に初午太鼓を教えに行くこともあるため，その際に川口市の歴史にも触れるのだそうである．初午太鼓を叩く人はどの人も，初午太鼓が火伏せを願うものであることや，鋳物工業の存在の意識があるはずだという．

青木中央小学校での聞取りによると，市内の小学校は全て３年生の社会科で川口市に関する授業をするため，そこで鋳物についても触れるとのことだった．社会科の授業では，市内統一で『かわぐち』という教科書を使う．川口市教育委員会と川口市地域学習指導法研究委員会編集，株式会社中央社発行の教科書である．この教科書では川口市の歴史や特徴のある文化，生活に関わることなどを扱っている．青木中央小学校では，この教科書と社会科の教科書の二つを用いて，週３回ある社会科の授業で３年生と４年生の２年間かけて学習する．二つの教科書を用いることで全国と川口市を比較し，より明確に川口市の特徴をとらえながら学習していく．また，青木中央小学校では工場見学をする機会もあり，実際の職人に文鎮作りなどを指導してもらい，鋳物体験をすることができる．クラブ活動が始まるのは４年生以上なので，まさに川口市の鋳物工業と結びつけながら初午太鼓を習得していくのである．

小鳩幼稚園では園児に対して簡単に初午太鼓の説明をしている．また，太鼓の練習をするにあたり保護者の協力が必要不可欠となるため，保護者に対しても初午太鼓のことや初午太鼓コンクールの趣旨について説明する機会を設けている．

一方で川口初午太鼓連絡協議会会長のＫ氏は，これまでさまざまな太鼓クラブで初午太鼓を教えてきたが，その活動の中で得た感覚としては，初午太鼓と鋳物工業の関連意識を持っている人は全体的にまだ少ないという．Ｋ氏が指導している太鼓クラブの一つであるさくら太鼓クラブは，川口市生まれではない人が入ることがあり，現状ではメンバーのほとんどが川口市以外の生まれだそうである．

川口市以外から転入した人々は，そのほとんどが初午太鼓はもちろん鋳物工業のことを知らないため，川口鋳物工業協同組合は，川口市の地域産業である鋳物工業や，そこから派生してできた初午太鼓について伝える活動をしている．

具体的には，コンクールのパンフレットに初午について説明する欄を設けたり，登録には至らなかったが無形文化財に申請したりしている．コンクールの２週間前に

はJR川口駅東口広場（きゅぽら広場）にて一般向けに初午太鼓のデモンストレーションを行い， PRをしている．また，小学校の授業の一環で初午について説明し，実際に太鼓に触れてもらうこともする．毎年５月に川口市金山町にある川口神社で「金山神社例大祭」を行っているが，2018年からはそこで初午太鼓を叩くことになった．また，川口市の推薦を受けて2017年，初午太鼓保存会が彩の国コミュニティ協議会のシラコバト賞を受賞した．この賞は，日頃身近なところで住みよい地域社会を実現するため，積極的な実践活動を続けている個人および団体等に贈呈され，その活動と功績を顕彰するとともに地域活動の促進を図るため制定されたものである[7)]．初午太鼓保存会はこの中で，「郷土を知り，郷土を想う活動」の項目で受賞した．初午太鼓という川口市の歴史や文化を保護し後継の育成を図る活動が評価されたのである．

また，川口市では毎年10月末に「川口市産品フェア」が開催される．これは鋳物だけでなく機械，植木など川口市の名産品を市内外の企業や市民，近隣自治体などにPRするための,川口市産業振興課が行うイベントである．川口市の複数の産業が一堂に会するイベントだが[8)]，これにより川口市育ちではない市民も川口市の鋳物工業のことを知ることができる．

４．考察

以上を図にまとめると（図８），戦後から1970年代にかけては川口市の中で鋳物工業や初午太鼓の存在は大きかったが，現在ではその存在が小さくなり，逆に女性や子ども，初午太鼓コンクールの存在が大きくなっている．鋳物工業を「川口らしさ」ととらえる市民の意識がなくならないよう繋いできた存在が，新しい形式の初午太鼓だったのである．

このような現状を見ると，なぜ担い手が移り変わりながらも初午太鼓は盛んなのかという疑問が出てくる．それは，川口市における地域アイデンティティの再興と，住民のサードプレイスとしての役割が合致したからではないかと考えられる．

社会学者の藤田（2003: 148）によると，住民が共同性としてのアイデンティティを感じるのは地域という生活の場であるので，鋳物工業が生活から離れてきている現在の川口市の中で新たに市民としてのアイデンティティを形成するのは難しい．また，現在一定の割合を占めている転入者に対しても同じことがいえる．そのため初午太鼓は重要な役割を果たす．楽器の演奏という気軽に楽しめるものであり，音が胸に響いてくる感覚に足を止めやすく，祭りやイベントで格好良く披露されているのを

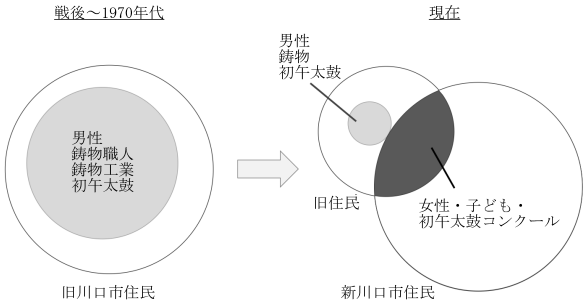

図８　川口における鋳物工業の存在感の変化

見て興味を引かれる．そして少し踏み込んでみると初午太鼓の裏には長い歴史があり，鋳物工業と強く繋がる存在であること，その鋳物工業が川口市を支えてきたことを知る．受け入れやすさを維持したままで川口市への歴史的な理解を深め，アイデンティティを育むきっかけとなるのではないだろうか．

女性に注目すれば，以前は既婚女性といえば「農家の嫁」や「自営業のおかみさん」として家族と共に働いているものだったのが，会社員が増えるとその妻は大抵専業主婦になった（落合 2004: 247）．これは川口市でも同じことがいえ，以前は鋳物工業関係者の妻が多かったのが，会社員の妻が増えた．そして次第に女性も会社などで働くようになり，社会進出していった．そのように生活が変化していく中で，女性はサードプレイスとしての居場所を初午太鼓に求めたのではないだろうか．

サードプレイスとは，前述の通り，家庭（第１の場）でも職場（第２の場）でもない第３のインフォーマルな公共生活の場のことである．その中でも個人で居心地よく過ごす「マイプレイス型」と交流を主な目的とする「交流型」に分類することができ，後者はさらに社交的な交流を目的とする「社交的交流型」と社交以外の何らかの明確な目的がある「目的交流型」に区分することができる（片岡・石山 2017）．これを現在の川口市に当てはめてみると，太鼓クラブ等は太鼓の技術習得や郷土芸能の継承を目的としているので,「目的交流型」に該当すると考えられる．

和太鼓颯の聞取りの中にもあったように，大人のメンバーは和太鼓颯のメンバーと生活や仕事の相談もしており，活動以外の交流機会も多い．意識して交流機会を作らずとも，共に汗を流し太鼓を演奏することで自然に心の繋がりは生まれただろう．これにより女性たちは日頃の家庭のストレスから解放され，息抜きができたのではないだろうか．また現代においても，都内へ働きに行く会社員は，太鼓に携わることで「地域との繋がり」を感じていることがわかった．

Ⅳ　おわりに

本研究は，地域産業である鋳物工業が変容していく川口市において，鋳物から派生した初午太鼓が盛んになっていることの意味を明らかにすることを目的とした．そのために実際に初午太鼓に関わる人々への聞取り調査を行い，川口市を客観的にとらえるために各種統計データも分析した．それらを通し，初午太鼓が地域アイデンティティの再興とサードプレイスの役割を果たしているということがわかった．

初午太鼓は，川口市育ちではない人々にとっては，近隣社会，川口市への愛着（地域アイデンティティ）を形成するためのきっかけとなり，担い手にとってはサードプレイスという自由な居場所にもなっている．人々が地域との繋がりを求めたり，自分らしくいられる場所を求めたりする限り，初午太鼓のような存在はその受け皿となり得る．だからこそ初午太鼓は，鋳物工業が変化してきた川口市において，結果として興隆するようになったと考えられる．

本研究では現在の川口市における初午太鼓の位置づけを明らかにすることができたが，特に女性にとって初午太鼓がどのような意味を持つのかを深く追究することができなかった．初午太鼓は鋳物工業という男性世界から生まれた文化であるが，現在関わる人の７割が女性であるため，より焦点を絞って調査をすることでそこに何かしらの意味を見出すことができると考えられる．

付記　調査の実施にあたり，川口鋳物工業協同組合や和太鼓颯の皆さまをはじめ川口市の皆さまに多大なご協力をいただきました．末筆ながら心よりお礼申し上げます．なお本稿は，お茶の水女子大学文教育学部地理学コースに提出した2017年度卒業論文に基づいており，日本地理教育学会2017年度全国地理学専攻学生卒業論文発表大会（2018年３月15日　東京学芸大学），およびお茶の水地理学会総会（2018年５月26日　お茶の水女子大学）にて概要を報告しました．会場にて有益な質問，コメントをくださった方々に感謝します．

注

1) 川口市ホームページより．http://www.city.kawaguchi.lg.jp/kbn/01050014/01050014.html（最終閲覧日：2017年12月10日）

2) 川口市統計書より．

3) 川口鋳物工業協同組合ホームページ「鋳物の歴史」より．https://www.kawaguchi-imono.jp/?page_id=7（最終閲覧日：2017年12月10日）

4) 学校法人学習院ホームページ「院史小事典」より．https://www.gakushuin.ac.jp/ad/kikaku/jiten/（最終閲覧日：2017年12月10日）

5) 『広報かわぐち』2011年６月版より．

6) 『広報かわぐち』2011年３月版より．

7) 埼玉県「平成29年度県民の日記念式典」パンフレットより．

8) 川口市産業振興課「川口市産品フェア2017」ホームページより．http://www.kawaguchi-sanhinfair2017.jp/index.html（最終閲覧日：2017年12月9日）

文献

宇田哲雄 2012a．産業と地域社会秩序－埼玉県川口市を例として．民俗学論叢 27：67-80.

宇田哲雄 2012b．産業をささえる住生活－川口鋳物産業を中心に．風俗史学 49：31-44.

落合恵美子 2004．女は昔から主婦だったか．天野正子・伊藤公雄・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編『新編 日本のフェミニズム３ 性役割』241-248．岩波書店.

片岡亜紀子・石山恒貴 2017．地域コミュニティにおけるサードプレイスの役割と効果．地域イノベーション 9：73-86.

川口鋳物工業協同組合編 2007．『まだ100年，これから100年－新生への鼓動　川口鋳物工業協同組合創立100周年記念誌』.

川口大百科事典刊行会編 1999．『川口大百科事典』.

島田尚子 1990．都市化と円高に揺れる川口市の鋳物工業．お茶の水地理 31：31-42.

杉森創吉 1973．変革せまられる鋳物の町．月間福祉 2：27-32.

鶴見俊輔 1999．『限界芸術論』筑摩書房.

房前和朋・竹林征三 1995．労働歌・どんつき節の変遷から見る築堤工法の土木史．土木史研究 15：491-498.

藤田弘夫 2003．『都市と文明の比較社会学－環境・リスク・公共性』148．東京大学出版会.

きむら・ゆり（66期卒）

Reconstruction of Regional Identity: Foundry Industry, Hatsuuma-taiko Drum, and the Third Place in Kawaguchi City

KIMURA Yuri